日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol.16　平成１１年度 No.2 平成１２年 2月 9 日　　編集発行：日本国際理解教育学会事務局
〒161-8539　東京都新宿区中落合４－３１－１　目白学園女子短期大学内 TEL & FAX：03―5983―8132

■目次■

国際理解教育学会第１０回大会のお知らせ
平成１１年度スタディツアー報告
実践研究会報告
報告
お知らせ
理事会・常任理事会報告
寄贈文献・図書
新入会員及び会員異動
事務局からのお知らせ

国際理解教育学会第１０回大会のお知らせ

第１０大会準備委員長：田淵　五十生

国際理解教育学会の研究大会は、本年で第１０回を迎えます。本学会の研究大会では、国際理解教育をどう推進するのかという実践的な立場から、実践者と研究者が協同して論議を深めてまいりました。その意味で、教育実践の中から共有財産化を図る「実践の理論化」がめざされ、それと同時に、その理論を実践の場に適応する「理論の実践化」も試みられてまいりました。

今年度の研究大会の「公開シンポジウム」では、「国際理解教育で『総合的な学習』をどう創るか」というテーマで議論を深め、目前に迫った「総合的な学習の時間」に対して、学会としての責任を果したいと考えています。また、特定課題研究では、「グローバル時代における国家と私たち」という主題で国際理解教育の理論的な枠組みについて討議する予定です。ご期待下さい。

準備委員会として、研究大会の案内を会員以外にも行う予定ですが、会員の皆様方からも、広く参加を呼びかけていただきたく存じます。

奈良の六月は若葉の美しい季節です。かつて、松尾芭蕉が唐招提寺を訪れ、鑑真和上像に接したとき、「若葉して、おん目の涙、ぬぐわばや」と歌っています。緑滴る古都に皆様をお迎えできることを楽しみにしております。

日程は次のように行われます。

１．期日：２０００年6月１０日（土）・１１日（日）
２．場所：奈良教育大学
　　連絡先：〒６３０－８５２８ 奈良市高畑町 奈良教育大学 社会科教育研究室
　　日本国際理解教育学会第１０回大会準備委員会
　　ＴＥＬ／ＦＡＸ：０７４２－２７－９１６８（岩本研究室） E-mail―iwamoto@nara-edu.ac.jp
　　ＴＥＬ／ＦＡＸ：０７４２－２７－９１７７（田渕研究室） E-mail―tabuchi@nara-edu.ac.jp

3．内容：

6月10日（土）

午前 自由研究発表

午後 総会　公開シンポジウム　懇親会

6月11日（日）

午前 自由研究発表

午後 特定課題研究

4．公開シンポジウム

基調講演　梶田 叡一（京都ノートルダム女子大学学長）

提案者　渡邉 千景（私立桐朋女子高等学校）

氏部 公也（神奈川県茅ヶ崎市円蔵高等学校）

西上 寿一（奈良県河合町立河合第一小学校）

指定討論者　佐藤 郡衛（東京学芸大学海外子女教育センター）

古川 治（大阪府箕面市立止々呂美中学校）

渡部 淳（国際基督教大学高等学校）

司会者　米田 伸次（帝塚山学院大学国際理解研究所）

田渕五十生（奈良教育大学）

平成１１年度スタディツアー報告

国際委員会委員長：千葉 杲弘（国際基督教大学）

国際委員会は１９９９年8月5日から１５日までユネスコ本部とドイツのスタディツアーを実施した。これは１９９６年のユネスコ本部とウイーン・ジュネーブにある国際機関訪問、１９９７年のスタディツアーにつぐ3回目のスタディツアーであった。

ドイツを訪問国に選んだ理由は、第一に、ドイツでは国際理解教育が非常に盛んで、その協同学校活動は世界的に有名なことである。特にドイツユネスコ国内委員会は積極的に国際理解教育を推進しており、１９８８年には、１９７４年国際教育勧告のフォローアップのためにブラウンシュベイクにおいて国際会議を開催したり、１９９３年にはユネスコ協同学校事業（ＡＳＰ）の４０周年を記念してゾーストにおいて国際会議を開催して、１９９４－２０００年のＡＳＰストラテジーと行動計画を採択するなど、国際的にもイニシアチブをとっている。ドイツの国際理解教育に対する熱意の根源を探ることは、日本の国際理解教育の振興のために有意義であると思われたからである。第二の理由は、教科書の二国間、多国間相互研究や改善で有名な Georg Eckert 国際教科書研究所の活動について研究することであった。

たまたまユネスコの平和・人権・民主主義国際諮問委員会で御一緒した Hufner 教授がドイツ・ユネスコ国内委員会の会長に選出された折に、お祝いのメッセージとともに国内委員会に対してスタディツアーのアレンジをお願いしたところ快諾をえたので、スタディツアーが実現した。国内委員会の御好意に心から感謝する次第である。同時に国際理解教育の進展に対して、世界的なネットワークと連係、そして国内のインフラを確立したユネスコの存在についてあらためて感嘆した次第である。

スタディツアーには計８名が参加した。主催者としてはもっと大勢の参加者を期待したが、実施にあたっては最も適正な数であった。8月6日にはユネスコ本部を訪問して、ユネスコの国際理解教育の活動、協同学校事業計画の推進状況、社会科学セクターの取り組み、そして２０００年の国際平和文化年の構想等について説明をうけた。

8月9日にボン到着、早速午後にユネスコ国内委員会の事務局長と協同学校の国内コーディネーターのブリーフィング。ドイツ国内委員会は、韓国の国内委員会と同様、役所の機構の一部ではなく、独立した組織であることが、ユネスコ活動への積極性を生む要因であるように思われた。

１０日にはブラウンシュベイグにある Georg Eckert 国際教科書研究所を訪問、ドイツとポーランド、ハンガリーといった、かつての対戦国間の教科書の協同改定等について Riemenschneider 博士より説明をうけた。さらに１１，１２，１３の3日間にわたり公立 Hanza 高校（Cologne）、Albert Schweizer 小学校（Viersen）、Nikolaus Cusanus 高校（Bonn）、Robert Wetzlar 職業学校（Bonn）を訪問し、8月１４日全員元気に帰国の途についた。

全日程の調整をされたドイツ国内委員会の Kristina Zillich さんと、訪問先に同行してくださった Ulrike Reinhardt さんに感謝の意を表する次第である。

なお、平成11年度のスタディツアーの日程は次の通りであった。

8月5日（木）　東京発　（成田国際空港）
　　パリ到着　（現地：8月5日）
6日（金）　ユネスコ見学と講義
7日（土）　終日　自由行動
8日（日）　午前中　自由行動
　　夕方　パリ発　→　ボン到着（同日）
9日（月）　ドイツ国内スタデイツアー（ユネスコ協同学校と共に戦後の歴史の共同認識のもとにかつての対戦
13日（金）　国であった国との教科書の協同改定作業を行ってきた Braunschweig の Georg Eckert Institute）
14日（土）　ボン発　→　成田　（現地：１５日到着）

◆平成１１年度スタデイツアーに参加して

◇小野山文子（埼玉県与野市立八幡小学校）

「アイデイアこそ新しい学習の始まり！」これが、今回ドイツでの学校見学後に、私が一番感じたことです。シュバイツアー小学校での絵文字による他国との文通や、ニコラス学校での企業との協力によるスポンサードウオークなど、楽しい国際理解教育の活動は、すべての先生方のアイデイアによるものでした。スポンサードウオークでは、マラソン大会で自分の目標を達成すると、地元の会社が援助金を出してくれます。自分の努力で世界の苦しんでいる友達を救えるとしたら、どんなに苦手な子でも頑張れそうです。どちらも、先生方のアイデイアが生かされた子供の意欲を引き出す素晴らしいプランです。「アイデイア・協力・学校の独自性の尊重」そして、これらにユネスコ協同学校のネットワークとユネスコ委員会の協力があれば、あらゆる活動に取り組めそうです。日本の学校でもアイデイアを生かして、新しい活動に取り組んで行きたいと思います。

◇中池さな恵（栃木県足利市立坂西中学校）

タイに続き、２度目のスタデイツアー参加となりましたが、前回と同様、大変有意義な研修をさせていただき、ありがとうございました。千葉先生をはじめ、このスタデイツアーに関わった全ての方に心からお礼を申し上げたいと思います。

私は以前、ユネスコのような国際機関で働くことに憧れを持っていたことがあったので、パリのユネスコの本部を実際に訪れ、職員の方のお話を聞くことができたことにはある種の感慨深いものがありました。

また、ドイツでは、小学校から大学レベルまでの、いくつかのユネスコ協同学校を訪問し、それぞれの学校がそれぞれのやり方で、ユネスコの理念を教育活動に反映させている様子を知り、大変参考になりました。中でも、シュバイツアー小学校では、カリキュラムの中に週２回のユネスコレッスンが組み込まれ、３，４年生の週１回の必修クラブにもユネスコクラブがあり、活発な活動が行われていました。国際理解を推進していく上で、カリキュラムの中に国際理解そのものに関する授業を組み込むことはかなり有効であるように思われました。

ドイツのゲオルク・エカルト教科書研究所では、第２次大戦後、戦争責任を明らかにし、侵略したポーランド、チェコ、フランスの学術研究者とともに、教科書の記述について研究し、提言を行っているとのことでした。私は、ドイツがどうして戦争責任をきちんと認めた上で、２度と同じ過ちを繰り返さず、国際平和を目指そうという確固とした姿勢を容易にとることができるのか、政治的に問題はないのか、不思議に思っていました。それは、ドイツの伝統的な民主主義によるものであることを歴史学の研究者の方から、具体的に説明していただき、納得しました。この研究所の試みのように、歴史的事実をどうとらえるか、議論の余地あるものに関しては、その視点を少なくとも２つ以上、教科書に提示していくことができたら、生徒の視野をもっと広げ、社会的事象に関する思考力も高められるのではないかと考えました。

今回の研修で学んだことを、何らかの形で、学校教育の中で、多様性を認め、お互い協力して幸せに生きようとする「共生社会」を作り上げていくために必要な態度の育成に生かしていきたいと思います。

ここで、研修以外の感想を少し述べさせていただきたいと思います。井田さんのお薦めのチュルリー公園の移動遊園地の観覧車がとてもよかったです。かなり早く回転して、周りの柵もないので、落ちてしまわないのか心配でしたが、見晴らしがものすごくいいし、スリルもあって、私はこれが、パリで一番気に入りました（小野山さんは少し怖がっていましたが）。また、この美しい公園の中で、小野山さんと２人、８時半の夕暮れ時の太陽の下、自分たちの影があまりにも長いことが何だか不思議で強く印象に残っています。今回は時間がなくて行けませんでしたが、次回はぜひ、須加先生のお薦めの世界遺産のサン・モン・ミッシェルに行き、マルシェで素敵な洋服を買いたいと思います。

私はドイツ料理はまずいという印象を持っていたのですが、ケルンで、ガイドさんお勧めの店で、何と１ｍもあるとてもおいしいソーセージを皆さんと一緒に食べてドイツ料理の印象が変わりました。また、ここのウエイターがとてもひょうきんな人で、「ドイツのMr.ビーン」と言ったら、大ウケしてくれて、大分サービスしてくれました。カレッジの日本人びいきの先生ご夫妻もとてもフレンドリーで会ったばかりの私たちによくしてくれました。この旅で、何人かのとても陽気で、気さくなドイツ人とお会いして、真面目であまり感情を表に出さないという、ドイツ人に対するステレオタイプ的な印象が変わりました。旅は行く度に新しい発見があるということを再認識させられました。

実 践 研 究 会 報 告

実践研究会実行委員長 米田 伸次（帝塚山学院大学国際理解研究所）

９９年度実践研究会は、「学校と地域を世界にひらくー総合学習を視野に入れながらー」を総合テーマに、下記のような内容で開かれた。

1　日時　１９９９年１１月２７日（土）　１０：００～１６：３０
2　研究会場　大阪市立労働会館（アピオ大阪）
3　日程
プログラム［1］　シンポジウム「グローバル時代の地域社会と学校の役割」（１０：００～１２：３０）
司会　岡崎　裕（大阪市立此花総合高等学校）
パネリスト　大下雅則（大阪市立東住吉中学校）
「車椅子をアジアの障害者へー国際理解教育と人権教育の実践ー」
佐々木徹（大阪府立柴島高等学校）
「学校と地域社会による国際交流活動ーマイノリテイの視点からー」
福井　縁（とよなか国際交流協会）
「地域社会からの国際理解教育ー地方自治体の役割ー」
コメンテーター　田淵五十生（奈良教育大学）、米田伸次（帝塚山学院大学）
プログラム［2］　分科会（１３：３０～１６：３０）
分科会Ⅰ（小学校部会）
司会　石崎厚史（大阪府立啓発小学校）、服部久美子（神戸市立こうべ小学校）
発表１　仲川順子（地球市民国際フォーラムなら）
「学校と地域をつなぐグローバルな市民活動ーなら・出会い・ウイークから見えてきたことー」
発表２　伊東あけみ（京都市立待鳳小学校）
「ヴェトナムの障害児たちとつながるー学校とＮＧＯの連携による国際協力活動の実践ー」
発表３　石井祐子（大阪市立北　小学校）
「在日外国人教育から国際理解教育へー『総合的学習』のなかでー」
コメンテーター　田渕五十生（奈良教育大学）、川端末人（神戸大学）
分科会Ⅱ（中学校部会）
司会　平岡昌樹(大阪市立天満中学校)、木下雅則（大阪市立東住吉中学校）
発表１　水口正巳（兵庫県山崎町立山崎西中学校）
「生徒たちが『トライやるウイーク』から学んだものー国際理解教育の視点からー」
発表２　坂東司朗（松原市立松原第七中学校）
「学校と地域が協力して築く多文化共生の町づくりー国際文化フェスタへの参加を通してー」
コメンテーター　米田伸次（帝塚山学院大学）、多田孝志（目白学園中・高等学校）
分科会Ⅲ（高校部会）
司会　柴田　元（大阪府立千里高等学校）、岡崎　裕（大阪市立此花総合高等学校）
発表１　近成俊昭（兵庫県立篠山鳳鳴高等学校）
「葛（くず）で結ぶ日本とフィリピンーＮＧＯと学校の協力による支援活動の実践ー」
発表２　奥谷寿香子（清教学園高等学校）
「学校・ＮＧＯ・アジアの子どもたち」
コメンテーター　岩崎裕保（京都芸術短期大学）、渡部　淳（国際基督教大学高等学校）

研究会は、シンポジウムと３つの分科会（小・中・高）によって構成されたが、その実践に当たっては、関西を中心として実行委員会が組織され、実行委員会が中心となってすすめられた。参加者は８１名（会員２９名、非会員５２名）とまずまず、川端副会長をはじめ、学会役員の中島、星村、田渕、渡部、多田（実践研究委員長）の各理事には、コメンテーターや助言者を務めていただいた。今回の実践研究会のねらいは、総合テーマにもみられるように、今回の教育改革の目玉、「生きる力」の育成と総合学習を、国際理解教育の分野で、学習と地域の連携を通していかに実践していくかについて討議するところにあった。

シンポジウムの概要については、シンポジウムをコーディネートし、当日、司会も務めていただいた岡崎 裕氏（大阪市立此花総合高等学校）にまとめていただいたので、それを掲載させていただくことで当実践研究委員会の報告とさせていただきたい。

◇岡崎 裕氏（大阪市立此花総合高等学校）の報告

シンポジウムでは次の３氏の提案があった。

1. 大下 雅則（大阪市立東住吉中学校）　「車椅子をアジアの障害者へ－国際理解教育と人権教育の実践」
2. 佐々木 徹（大阪府立柴島高等学校）　「学校と地域社会による国際交流活動－マイノリティの視点から－」
3. 榎井 緑（とよなか国際交流協会）　「地域社会からの国際理解教育－地方自治体の役割－」

最初に大下氏は、中学校の技術科の授業のなかで行っている実践について報告した。実践は、表題にあるように、修理した車椅子をアジアの障害者に贈るというものである。カリキュラムの展開には次のようなプロセスが読まれる。①車椅子の構造を学び、また廃棄された車椅子を修理することを通じて「障害」について学ぶ。②車椅子を日常的に使用する、障害者を持つ人々と交流する。③「アジア」とそこに生きる人々、そしてアジアにおける障害者の現状を知る。④修理した車椅子を発送し、それを契機にアジアの障害者と実際に交流を深める。⑤学習のプロセスとその後の展開に関してインターネットを通じて世界に発信する。こうした、国際理解・人権教育の多角的なアプローチによって、生徒は世界を学び、セルフエスティームを高めていくのである。

２番目に発言した佐々木氏は、学校の拠点の一つとした地域全体の活動として、子供たちがアメリカのマイノリティと交流した実践を報告した。報告では、地域社会において、特に被差別部落出身の子供たちが、自らのアイデンティティを確立していく過程で、アメリカの多文化社会の現状に触れ、国際的な人権尊重の視点が獲得されてゆく様子が報告された。実践の過程において、生徒の全体像を捉えるには、単に学校教育によるのではなく、「生活」の場である地域社会との連携が不可欠であることが指摘された。

そして最後に榎井氏は、地方自治体の国際交流協会の立場から発題を行った。現在動き出しつつある「総合的学習の時間」に関連して、学校と地域の国際交流団体との関係が必ずしも対等ではないことが指摘された。これは、学校が形式的な流れの中で地域社会の国際化を一方的に消費するのみで、地域に生きる外国人や子供たちを不当の意味でサポートしていないのではないか、という問題提起である。さらに、今後学校と地域の関係を考えるにあたっては「地域社会」の再定義が必要であることなどが指摘された。

報　　告

『第二回日韓青少年ネットワークフォーラム』に参加して

柴田 元（大阪府立千里高等学校）

『第二回日韓青少年交流ネットワークフォーラム』が、両国民間団体の主催で昨年１０月末から１１月初めにかけて韓国のソウルと江原道平昌で開催された。日韓の大学生、高校教員、ＮＰＯ実務者ら約百名が集い、未来を担う両国青少年の交流活性化と国際貢献のための方策を一週間にわたって話し合った。

この催しは、９７年１月に別府で行なわれた日韓首脳会談での合意に基づくもので、第一回は同年５月に大阪で開かれた。第二回フォーラムは、この二年半の間の両国の関係の変化や国際情勢の変化を踏まえながら、第一回において提示された理念や方策をより具体化し、来世紀に向けての日韓青少年交流の進むべき方向を示すことにより、両国の青少年交流のレベルをより高いものにしていくことを開催趣旨とするものであった。

李御寧先生の「新しい千年の日韓青少年交流」と題する基調講演の後、全体会ではまず両国の主題発表が行なわれた。廉載鍋・高麗大学教授は、「日韓の青少年は概ね制度化された認識の枠を以って相手を理解しており国家という抽象的なレベルで相手を認識しているが、現実には世界で最も似通った社会的文化的な同質性を共有しているといえる。来世紀

の新たな日韓関係を構築するためには緊密な交流を通して自然な相互理解をはかる必要がある」とし、政府や市民団体など多様なレベルで交流活性化のためのプログラムが開発されるべきだと指摘された。米田伸次・帝塚山学院大学国際理解教育研究所長は、まず、第一回フォーラムから第二回までの間に日韓両国間や国際社会に起きた重要な変化として、①日韓青少年交流の一層の広がりと多様化、②金大中大統領来日に基づく『日韓共同宣言』と『行動計画』の共同発表、③国連とユネスコによる「平和の文化」の提起、をあげられた。そうして歴史を直視し、寛容・和解・対話を踏まえた『共同宣言』の市民レベルでの内実化と具現化が必要であることを強調された。同時に、両国間の青少年交流の成果を社会化し共有化していくためのネットワークの構築が必要であることも指摘された。

二日目からは、分科会討議が始まった。高等教育分科会の討議主題は『国際化と青少年多文化理解教育』であった。まず、主題に限らず、分科会で話し合いたいことを両国の参加者から出してもらった。日本側からは、おもしろい授業方法についての意見交換、教育現場での悩みの共有、「在日」韓国人を視野に入れた議論などが、韓国側からは、教員交流のあり方や文化紹介を中心とした交流方法について、学校や家庭での生活指導のあり方について、などが出された。今回の出会いを大切にしたいという発言が、両国参加者の多くから出されたことが印象的であった。

討議を始めるにあたり、韓国側モデレーターの韓龍震・高麗大学教授は、日韓交流は「感性」「理性」の基本的段階を経て、各人が徳の実現について考える「特性」段階に達した時に初めて実効性を持つ、これが韓国でいう「弘益人間」精神の領域であり、国際社会の基本とされねばならないものだとコメントされた。次に、米田先生は、「国際社会で貢献できる市民を育成の目標とする」という第一回フォーラムの提起を重視され、日韓両国の国際理解教育、多文化理解教育（ユネスコのいう「平和の文化の教育」）をどのように連携し、２１世紀の新たなパートナーシップの構築に向けて共同開発し成果を共有化していけばよいのかを討議すべきだとされた。また、日本の高校生の韓国理解と友好の促進に大きな意義を持つ韓国修学・研修旅行における交流の質を、さらに高めていく必要のあることを強調された。

熱心な討議の結果は、共同発表文のなかに集約された。「２１世紀の地球市民社会を担い、平和の文化の創造に貢献する日韓の青少年の出会いと教育の重要性を認識し、双方の制度化された認識の壁を克服するため、日韓間の青少年および教員交流について、次のような事項を実践すべく努力することにした。①交流を促進するため、本フォーラム参加者を中心としたネットワークを構築すること、②ホームページ、テレビ授業、フォトメッセージ、ビデオレター等のサイバー空間を利用して出会いの機会を増やすこと、③両国の文化紹介、多文化理解、グローバル・イシューに関する教材を開発・交換すること。」

最終日、有田典代・関西国際交流団体協議会事務局長は会議総括評価の中で、李御寧先生の「市民、地域レベルでの情報発進、これがグローバリズム」ということばを引用し、「ＮＰＯ、教育機関、行政等が連携・協調しながら、東アジア全体の平和の文化形成に貢献する世界市民を育成する必要がある」「日韓の新しい関係構築はそれへの第一歩である」と締めくくった。

フォーラムに参加して、国際理解は正しく人間理解が基本であることを実感した。また日本人を、さらには自分自身を見つめ直す、絶好の機会にもなった。アジアや太平洋をも視野に納めながら、日韓間の交流を促進するネットワークを形成していくことが、いま求められているのではないかと思う。

お　知　ら　せ

◆国際委員会より（千葉　杲弘）

――２０００年は中国へスタディツアー――

国際委員会は、２０００年８月の後半に１週間から１０日の中国へのスタディツアーを計画しています。具体的な内容や訪問地、機関名については、これから中国ユネスコ国内委員会に依頼して決定しますが、これまでのスタディツアーとは趣を変え、日本側からは日本の国際理解教育のなかで取り上げられている中国についての教育を紹介し、中国からは、中国の小中校における日本の教育の現状について説明してもらい、それぞれの国の抱えている教育の主要課題について理解を深めると共に、それぞれ自国について如何に相手国において教えてもらいたいかということについて意見を交換しようと思います。

参加者は例年１０－１５名を予定しています。小中校の国際理解教育で中国を取り上げたり、興味を持っている先生方、研究者、ＮＧＯ関係者、大学院生等の参加を勧めます。中国側に日本語通訳を依頼する予定です。参加者を早めに決定して事前研究をして頂きます。参加希望者は、下記までお申し込み下さい。参加希望者が多数の時は先着順で締切らせていただきます。

□申し込み先

千葉杲弘　国際キリスト教大学
１８１－８５８５　東京都三鷹市大沢３－１０－２
ＴＥＬ：０４２２－３３－３１４３　ＦＡＸ：０４２２－３４－６９８２
Ｅ－ＭＡＩＬ：chibaa@icu.ac.jp

◆第２回懇話会のお知らせ（渡部 淳―国際基督教大学高等学校）

懇話会は、第１世代ともいうべき会員の方々に、形式ばらない雰囲気の中で、つぶさに研究の歩みを語っていただくとともに、参加者の側からも質問させていただくという会です。会員の自由な相互交流を通じて、研究のさらなる活性化が図られることを願って設けられました。

第２回目として、常に国際理解教育の第一線で発信を続けている米田伸次先生（帝塚山学院大学）を囲む会を企画いたしました。米田先生には、「国際理解教育４０年」と題して、中国・韓国との民間交流、高校ユネスコ運動の盛衰、国際理解研究所の活動などについて語っていただく予定です。どうぞふるってご参加ください。

日時：３月１０日（金）　午後６時～８時
会場：日本国際交流振興会８階会議室（渋谷東ビル８Ｆ、ＪＲ渋谷駅より徒歩３分）

□申し込み先及び方法

ＩＣＵ高校・地理公民科あてに、ファックスでお願いします。
ＦＡＸ：０４２２－３３－３３７６
その際、氏名および連絡先電話番号を必ず明記して下さい。

理事会・常任理事会報告

◆第１回常任理事会報告

日時：平成１１年９月２２日（水）午後１時４５分～４時３０分
場所：目白学園女子短期大学会議室
出席者：天城、天野、安藤、川端、多田、千葉、中島、樋口、米田、渡部、中西
議題：

Ｉ．報告事項

（１）第９回大会報告

○樋口理事より次のような大会報告があった。
・大会参加者は２００名弱（最大は２３０名）であった。
・個人的な感想として、熱気があるようにするには現場の先生がもっと参加するような魅力的な大会であって欲しい。そのためには理論と実践を分けるのも一方法である。
○第９回大会に基づき、例年のように詳細な大会マニュアルが作成され、今後の便宜が計られることになった。
○別紙の資料により第９回大会収支決算報告があり承認した。

（２）スタディ・ツアー報告

千葉理事より別紙の資料により、本年度のツアー報告があった。

（３）紀要第６号の編集状況について

渡部理事より紀要編集状況について次のような報告があった。
・１５点の応募があったが、実際の投稿数は８点であった。
・特別寄稿や実践研究委員会のシンポジウムを採用できればと考えている。
・スタディ・ツアーの成果または国連の「平和の文化」年に関するものも考えられる。
・「研究余滴」も継続したい。

（４）　平成１２年度第１０回大会について

○田淵実行委員長の伝言として、米田理事より「特定課題研究につき研究委員会の提案によるものの他、大会実行委員会が教育現場の必要を踏まえ設定したものを企画させて頂けないかとの提案があった。

○その他、以下のことが話し合われ、大会実行委員会での審議事項とした。

・１１月開催予定の実践研究会の成果を大会とつなげる方向で考えられないか。

・この大会を１０周年記念大会として、シンポジウムや特定課題研究を位置付けられないか。

・県教育委員会協賛とし、可能な限り参加者を多くできないか。

（５）　その他

千葉理事より、アジア・太平洋地域の動向、特に韓国で開催される「アジア・太平洋地域教育者研究会」について報告があった。

II．審議事項

（１）　平成１１年度実践研究会について

米田理事より別紙の資料により実施概要の説明があり、承認した。

（２）　平成１１年度の研究と特定課題研究について

研究委員会所属の理事が欠席のため、代って中西理事に送られてきたメールに基づき報告があった。

・基本的には平成１０年度からの特定課題研究の継続と考えているが、具体的なテーマは検討中である。

・現在学校で行われている国際理解教育の実践の実態を踏まえて、実践に即したテーマと進め方を考えている。

・平成１２年度の大会での特定課題研究は平成１１年度の継続の他に、実践的なテーマを設定し、２本立てで考えられないか、研究委員会に申し送ることにした。

（３）　アジア・太平洋地域国際理解教育会議の決算について

上記会議の３月の決算報告で、千葉理事名義の寄付となっている１４万５円について、常任理事(１７名)が均等に負担(１人当たり８，２４０円)することにした。

（４）　年度末決算報告書について

・公文国際奨学財団の助成金は、本来の趣旨である学会の紀要に支出されていることもあり、現状のままでよいこととした。

・従来の予算案での支出科目になっている「大会運営費」を、１１年度総会において修正されたように「大会運営補助費」と科目の名称変更を行うこととし、年度大会の決算については理事会で報告するものとした。

・従来はAPNIEVE会費を国際委員会予算に含んでいたが、次年度からは別途の項目をたて、会費＄１００を計上することにした。

（５）　「第２回日韓青少年交流ネットワークフォーラム」参加者推薦について

日韓文化交流基金より依頼のあった上記フォーラムの参加者推薦について検討の結果、大阪府立千里高等学校柴田元教諭を推薦することとした。

（６）　新入会員審査

次の９名の入会希望者について審議の上承認した。

伊東弥香、岡村圭造、向山裕子、早川則男、大見泰子、服部孝彦、久松宏二、田島弘司、中村淳

（７）　その他

①　学会のホームページを開設した。アドレスは次の通り。

http://www.nttl-net.ne.jp/kokusaig/index.htm

なお、作成には斎藤護会員の世話になったことが報告された。

②　本学会が学術会議に登録されることとなった。なお、会員候補者の選定は会長及び副会長に一任された。

③　理事会及び常任理事会の議案は事務局でまとめた原案を会長、副会長、各委員長に回覧の上、調整の必要があるときは会長・副会長で合意したものを議案とすることにした。

④　相良憲昭会員を会長推薦理事として推薦することになり、承諾をとることにした。

⑤　平成１２年度に実施予定の理事選挙では、人事の刷新が期待され、その方策につきビジョン検討委員会に付託することとした。

◆第２回理事会報告

日時：平成１１年１２月１９日（土）１３：３０～１７：００

場所：目白学園女子短期大学会議室

出席者：天城、天野、安藤、宇土、岡田、川端、、相良、島、多田、田淵、千葉、中島、中西、中村、樋口、星村、米田、渡部

Ⅰ．報告事項

（１）第１０回年次大会の準備状況

田淵理事より資料１に基づいて現状報告があった。シンポジウムの提案者は小・中・ 高の実践者より１名ずつ予定している旨の説明があった。

審議の結果、日程については初日の総会をシンポジウムの前にもつこと、２日目の自由研究発表を午前に、特定課題研究を午後にすることとした。

（２）研究委員会の動向と課題について

宇土理事より資料２に基づいて以下の報告があった。

特定課題研究の継続として、実際の教室の子供たちにはどのような意識や態度が見られるかを知るため、個人－地域－国－地球に対する意識調査を実施し、国際理解教育のカリキュラムや実践に役立てるための活動をしてきた。

（３）平成１１年度実践研究会の報告

米田理事より資料８に基づいて１１月に行われた研究会の報告があった。

（４）紀要第６号の編集進捗状況について

渡部理事より資料３に基づいて編集状況の現状報告があった。この中でリライト中の実践研究２本のうち１本は実践報告となる予定である旨の報告があった。

（５）会費納入状況について

中西理事より現会員数は464名で内11年度の会費未納者は108名（納入率　76.7%）であること、今後９８万円の支出が予定されているとの報告があった。

（６）国際会議の件

中西理事より国際会議で千葉理事名義の寄付となっている支出金に関し、常任理事会の決定で常任理事に均等に負担してもらった旨の報告があり、千葉理事から謝辞があった。しかし、この件に問題提起があり議論もあったが、議長採決で常任理事会の決定通りに処理された。

Ⅱ．審議事項

（１）　平成１２年度スタディ・ツアー計画について

千葉理事より資料６のスタディ・ツアー計画案が提案され審議の上承認した。

中国では上海特別区が熱心に取り組んでいること、小・中の教員のほか高校の教員を参加させたらどうか、学会からの引率者には旅費を払うべきではないかなどの意見があった。旅費については継続審議とした。

（２）　創設１０年を経由した学会の基本的課題の明確化と組織運営の再検討について

川端理事より資料４に基づいてヴィジョン検討委員会のこれまでの会合と内容及び今後の作業日程をおりこんだ中間報告として下記の提案があった。

①常任理事会より委託の次期役員選挙に期待される人事刷新の方策について慎重な配慮をもって着実に作業を進めている。

②この人事刷新も今後国際理解教育に寄与すべき学会発展と切り離しては考えられない。「総合的な学習」の実施も目睫にせまっており、少なくとも小・中のカリキュラム作成は緊急に取り組むべき学会の課題である。

③年次研究大会、実践研究会、特定研究課題、また科研報告書や国際会議の成果なども将来の発展に継承されるよう総括する問題も残されている。

④創立10年を契機に、学会の基本課題の明確化と組織運営上の再検討（例えば他団体からの研究プロジェクト提案に対する対応手続きなど）も必要である。

⑤各委員会の在り方や会員数増大の方途の検討も必須である。

以上の提案に対し人事刷新の方策については、現理事の意向などのアンケート調査も加味したらどうかの意見もあり了解された。

（３）特定課題研究について

12年度の大会で予定されている特定課題研究について、宇土理事より次の提案があり検討した。

昨年度の『基本概念としての「国」を問う』を継続し、「国際理解教育の学習として「国」を個人－地域－国－地球の関係論の中で、どう扱うか」に焦点を当てて展開していきたい。具体的には教育実践に結びつくようなテーマ（平和・人権・共生・交流など）やトピック(例 パスポート等)を取り上げながら「国」との関係の中での学習を論議したい。

これに対し次のような意見がでた。

①テーマを明確化して欲しい。大会予告のためにも。

②教育現場がどのような国際理解教育の課題を抱えているのか調べるべき。

③参加型の課題研究にし課題をもって参加する会員と分かち合えるような場にしたい。

④前回は「国」の概念を中心にしたから、次回は「国」の分析をすべきでは。

⑤テーマとして「今国際理解教育での視点での国家をどう考えるか」、「子ども世界観の発達と国家イメージ」、「グローバル化時代における国家と私たち」が提案された。

次回の理事会で具体的なテーマや提案者等の原案を審議することとした。

（4）平成12年度実践研究会の計画について

多田理事よりの資料7による提案と実践研究会の在り方について次のコメントがあり承認した。

①実践研究会によって研究会の地域のまとめ役を作りたい。

②参加者が満足するような参加型の会にしたい。

③実施によってその地域の組織化をはかり研究の継続性を持たせたい。

④理事の参加と関与が必要である。

（5）第2回懇話会の開催と人選について

渡部理事より第2回懇話会を米田理事を招いて3月初旬から中旬にかけて開きたい旨の提案があり承認した。なお、詳細は次号のニューズレターで案内する。

（6）平成13年度第11回大会開催校について

中西理事より第11回大会は筑波大学(実行委員長嶺井明子理事)）と交渉中である旨の報告があった。

（7）新入会員審査と退会会員について

資料5に基づいた審査があり承認した。なお、会員の専門分野を明確にして欲しい旨の要望があった。

新入会員→高尾隆、佐藤昭治、マスデン真理子、長谷川朋美、片山聡彦、刈間順子、井口美弥、紀本栄一、水谷豊、玉井裕子、板東司朗、渡邉千景、山田正人　（以上１３名）

退会会員→大城浩、礎合宗隆、井上雍雄、長谷川秀吉、曾我邦子　（５名）

（8）事務局の件

中西理事より現在の事務局は平成12年度をもって閉鎖し、平成13年4月からは新事務局に移転して欲しい旨の要望があり了解された。今後、次の事務局の設置を理事会で諮ることになった。

寄贈文献・図書

◆会員の図書・文献寄贈

☆林洋和：「異文化理解教育教材論（1）－相対文化主義と異文化理解」広島県立大学論集

☆林洋和：「異文化理解教育教材論（2）－相対文化主義の視点から教材を考える」広島県立大学論集

☆林洋和：「異文化理解教育教材論（3）－ステレオタイプの問題点」広島県立大学論集

☆林洋和：「異文化理解教育教材論（4）－ステレオタイプの視点から教材を考える」広島県立大学論集

☆新保利幸：新保利幸著『高校生に今…イエス・ユーキャン』　川崎教育文化研究所

☆新保利幸：新保利幸著『英語教育における異文化理解へのアプローチ－子ども達が翔んだ－』川崎教育文化研究所

☆新保利幸：川崎市総合教育センター高校教育研究会編「教室の窓から世界が見える－生徒が主体的に取り組む教材と発展活動－」

新入会員及び会員異動

◆入会会員

以下の２１名の方が平成１１年７月から１２月の間に入会しました。

氏　名	所　　属	連　絡　先	
伊東　弥香	松香フォニックス研究所	１９４－００４１	東京都町田市玉川学園５－２４－４６
岡村　圭造	京都文化短期大学	６１０－０１０１	京都府城陽市平川鍛冶塚３１－７７
向山　裕子	鶴川高等学校	１９５－００５４	東京都町田市三輪町１２２ 鶴川高等学校
早川　則男	中村学園中村中・高等学校	２７０－１３４２	千葉県印西市高花６－１１－１２
大見　泰子	大阪ＹＭＣＡ国際専門学校	６３１－０００３	奈良県奈良市中登美ヶ丘１－４１６２－２， Ｂ１１－２０４
久松　宏二	慶應義塾湘南藤沢中・高等学校	１７６－０００４	東京都練馬区小竹町１－５２－８
田島　弘司	上越教育大学	９４３－０８１５	新潟県上越市山屋敷町１－１－１０５
中村　淳	札幌市立月寒小学校	０６１－２２８５	北海道札幌市南区藤野５条５―１３－２１
マスデン真理子	熊本大学留学センター	８６２－０９２４	熊本県熊本市帯山４－５５－１９ 第二保陽ビル４０３号
佐藤　昭治	一橋大学大学院社会学研究科	１８６－０００３	東京都国立市富士見台１－２４－７－２０１
高尾　隆	一橋大学大学院社会学研究科	１６５－００２６	東京都中野区新井１－２４－１０ シーダーハイツ１０５
長谷川　朋美	横浜国立大学教育学研究科	２４０－００６５	神奈川県横浜市保土ヶ谷区和田２－１８－４ サニーヒルズ２０２
片山　聡彦	茨城大学教育学部付属中学校	３１０－０９１１	茨城県水戸市見和１－３５９－６ 桜ヶ丘ＡＰ１９－３０４号
刈間　順子	港区立麻布小学校	１０６－００４１	東京都港区麻布台１－５－１５ 港区立麻布小学校
井口　美弥	上智大学大学院　聴講生	３５０－１２１３	埼玉県日高市高萩７２－６
紀本　栄一	大阪市立巽南小学校	５４４－０００１	大阪府大阪市生野区新今里１－１３－４
水谷　豊	桐朋学園大学短期大学	１８２－００１４	東京都調布市柴崎１－６３－１－５１２
玉井　裕子	日本語指導ボランティア	２２６－０００６	神奈川県横浜市緑区白山１－４－１ ローヤルシティ鴨居六番館１２０４号
坂東　司朗	松原市立松原第七中学校	５８０－００２５	大阪府松原市北新町６－２０４－９
渡邉　千景	桐朋女子中・高等学校	２２９－１１０３	神奈川県相模原市橋本 ３－１１－８－１００７
山田　正人	大阪府立松原高等学校	５５０－００１４	大阪府大阪市西区北堀江 １－２２－１１－６０１

現会員数　４７６　名

◆会員の連絡先移動

以下、学会員の方々の連絡先や電話番号等が変更になりました。

氏　名	連　絡　先	電話・ＦＡＸ
大前　敦巳		０２５５－２２－５５３２
加藤　優子	Langwith College University of York Heslington York YO10 5DD	４４１９０４　６５４７６１
倉橋　勝	１５０－００４６　東京都渋谷区松涛１－２２－１３　ル・コート２０２	０３－３４８５－１３３８
小室　桃子	１００－１６２２　東京都八丈島八丈町末吉５９２－２０２	０４９９６－８－０４５５
佐々　信行	6613　Beverly Avenue,　McLean　VA22101　USA	７０３－４４８－３７２２
下羽　友幸	FBII Japanologie Universitaet Trier Universitaetsring 15　54286 Trier Germany	

氏　名		連　絡　先	電話・ＦＡＸ
鈴木　陽子	１６２－８６４４	東京都新宿区戸山１－２４－１早稲田大学文学部	０３－３２０３－２７６６
鶴松　勝利	１６７－００３３	東京都杉並区清水１－６－１１	０３－５３９７－８２０４
柳橋　總子	４１０－０３０６	静岡県沼津市大塚１１７０－３―７－３０７	０５５９－６７－８６８９
ワールド	１６３－０９１９	東京都新宿区西新宿２－３－１新宿モノリス１９階	０３－５３２６－７１０３(電)
ファミリー		ワールドファミリー株式会社(代表　向井　一男)	０３－５３２４－０２８７(Ｆ)

事務局からのお知らせ

◆事務局ホームページ開設のお知らせ

ホームページを開設いたしました。ＵＲＬは次です。
http://www2.ocn.ne.jp/~kokusaig/

◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様が関わった文献・図書・報告書・教材など、また、会員の所属する学校での紀要等がありましたら、学会にご寄贈ください。最近そのような資料を求める方が増えております。学会の宣伝にもなりますのでお願いします。また、ニューズレターなどで会員にもお知らせしたいと思います。またその際、助成金をいただいている公文国際奨学財団にも送りたいので、できましたら２部お送りいただけますと幸いです。

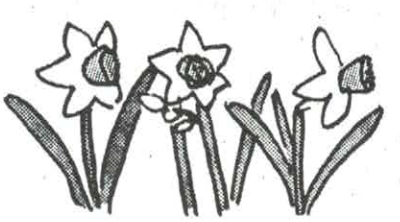
◆住所・所属等変更の場合のお願い

最近事務局から郵送物を送りましても返却される場合が増えています。住所等に変更がありましたら、ファックスなりＥメールでお知らせください。

◆年会費納入のお願い

当学会の活動のすべては会員の皆様の会費でまかなわれております。年会費未納の会員は会費をお支払いくださるよう宜しくお願い致します。

平成１１年度以降の会費：　正会員：８，０００円　学生会員：３，０００円　団体会員：３０，０００円

・郵便振り込み　口座番号　００１２０－５－６０１５５５（従来通り）
　　加入者名　日本国際理解教育学会
・銀行振り込み　富士銀行　中井支店（２４９）　普通預金
　　口座番号　１７８３８８６
　　名義人　日本国際理解教育学会

なお、平成10年度までは正会員の年会費は５，０００円です。